泥団子作り

幼保連携型認定こども園せいび　坂本 茜

対象：3・4・5歳児

活動スケジュール

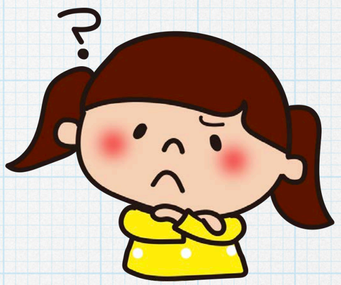
回数	内容	時期
1～4回目	砂団子から泥団子へ	11月中旬
5～8回目	白砂で磨く	11月中旬
9～10回目	布で磨く	11月中旬
11回目	色つけ	11月中旬
12～19回目	新しい泥	11月下旬～2月中旬
20～24回目	凹凸削り	2月下旬
25回	作り直し	3月上旬
26～30回目	凹凸埋め	3月上旬
31～32回目	手の平で磨く	4月上旬
継続中	…	…

テーマ設定の理由・背景

ピカピカの泥団子を作りたいという目的を持っていた子どもたち。砂では想像しているようなピカピカの泥団子は作れないということを伝えると、裏庭の土を使って作り始めた。始めはドロドロだった泥団子がだんだんと固まる様子を見て驚く子どもの姿や、その様子を見て興味を持った子どもたちが集まってきたことから、環境を整えて一緒に子どもたちの理想を追求したいと考えたから。

また、泥団子作りを通して、疑問に思ったことや興味深く感じたことを自身で考えたり、保育者に相談したり、友だちに尋ねたりと、周りとの関わりを深めながら自分なりの気づきや学びを深めるため。

問いを考える

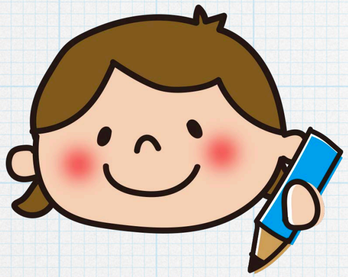


ピカピカの泥団子を作るためにはどのような土が必要なのかやどのような方法が適しているのかなどを自分なりに考えたり、保育者に尋ねたり、友だちと共有しながら創意工夫する中での、子どもたちの疑問や考えを問いとして設定する。

環境をデザイン

砂・土・水など、泥団子作りに必要不可欠なものに加え、子どもたちが普段から遊びの中で使用しているボールやザル・ふるいを使用する。また、子どもたちの姿から次なる展開を予想し、情報や道具を準備する。

子どもたちが疑問に思ったことや悩んでいることを、小市先生（造営遊び講師）に相談し、保育者だけでは知り得ない情報やアドバイスを貰う。



実践し、記録する

探究活動の様子は、写真及びブログで記録する。

振り返り、共有する

活動後、クラスミーティングやブログを通して活動内容を共有し、振り返る。

園内での『すくわく実践報告会』で共有する。

砂団子から泥団子へ

期待する経験

泥団子に向いている土を見分け、自分なりに工夫しながら泥団子作りをする。

子どもの姿

砂場の砂で泥団子を作ろうと試みている子が数名いたが、何度作っても乾いて壊れてしまっていた。

砂では泥団子が作れないことを伝えると、「どこの砂なら作れるの？」との声が上がり、裏庭の土を使って一緒に泥団子作りを始めた。

子どもたちは「全然違う。」「最初はドロドロだったけれど、ちゃんと固まるじゃん。」と驚いていて、その様子を見て興味を持った子が集まってきた。

＜準備した素材や道具＞
砂・水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース

＜環境設定＞
砂場を掘り起こし、砂を柔らかくしておく。
他児の遊びと混ざらないよう空間を分ける。
制作途中の泥団子をどれぞれとっておけるようにプラスチックケースを使用。

理想の追求

「壊れない、ピカピカの泥団子を作りたい」という理想を追い求め、どのような土ならそれが可能なのかを自分なりに考えたり、保育者に尋ねる等して知ろうとする姿が見られた。

子ども自身が興味深さを感じ、もっと知りたいと感じた時に、『好奇心』『探究心』が生まれるのだと思う。

実際に、泥を使って泥団子を作ってみることで、目に見えて砂で作る団子との違いを感じられ、理想へ近づけるという希望が見えた。それにより、子どもたちの探究心がより深まった。

白砂で磨く

期待する経験

泥団子に向いている土を見分け、自分なりに工夫しながら泥団子作りをする。

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

子どもの姿

泥団子にかける白砂を何度もふるいにかけて石を取り除いたり、亀裂に水をつけて馴染ませてから白砂をかけたりと、自分なりの創意工夫を始める。

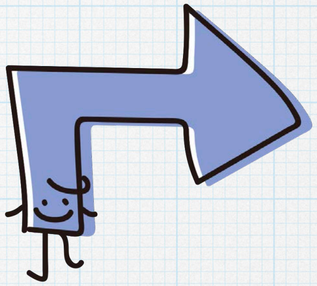
やってみて良かったことを「ここの砂使ってから、こっちの砂使うと良いよ。」と友だちに共有したり、「割れそうなんだけど、どうすれば良い？」と友だちを頼る姿が見られた。

泥団子についた細かい砂を取り除くためには、ストッキング等で磨くと良いことを伝えると、まずはティッシュで磨いてみる子がいた。

＜環境設定＞
他児の遊びと混ざらないよう空間を分ける。
白砂をとっておけるよう場所を設けた。

＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
ティッシュ

興味関心の継続



友だちと共通の目的を持って遊ぶことで、互いの発見を共有したり、励ましあったりと関わりが生まれた。友だちの泥団子を見て「自分もあんな風に作りたい」「凄い」と刺激を受けることで、より意欲的になったように感じている。一人では継続して取り組むことが難しいことも、友だちと一緒だと刺激を受け、興味関心が継続するように思えた。

理想に近づけるべく様々な工夫を凝らし、それによって効果が得られると、それが意欲となって次へ繋がっていた。目的や理想を追求することで、興味関心が継続されているように感じた。

探究的遊びを発展させるためには、子どもたちが何に興味を示しているかに加え、今後どのようなことに興味を持つか、先を見据えることが必要になってくる。その予想をもとに、情報や道具を準備しておくことで、新たな気づきや興味が生まれ、遊びが発展する。

布で磨く

期待する経験

泥団子に向いている土を見分け、自分なりに工夫しながら泥団子作りをする。

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

子どもの姿

「〇〇くんは、泥団子マスターなの？」「〇〇くんの泥団子凄い。あんなの作りたい。」と友だちに憧れたり、頼る姿が見られ、初めは保育者に作り方を訪ねてきていた子どもたちが、だんだんと子ども同士で教え合うようになってきた。

ティッシュで磨いていた子が、ティッシュでは目が粗く、細かい砂が取れないことに気がつき、ストッキングに似た布を探し始めた。

＜環境設定＞
他児の遊びと混ざらないよう
空間を分ける。

＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
布

対保育者→対友だちへ

今までは保育者を頼っていた子どもたちが、だんだんと友だちに憧れたり、頼る姿が見られるようになり、子ども同士で教え合うようになった。特に、当初から泥団子作りをしている子どもたちは、後から泥団子作りを始めた子どもたちに頼られることも多く、それが自信や意欲に繋がっていた。

泥団子をティッシュで磨いていた子が、ティッシュでは目が粗く、細かい砂が取れないことに気づき、ストッキングの代用品を探した。その際には、周りの友だちにどのようなものが良いかと相談したり、一緒に泥団子を作っていた保育者以外の保育者にも尋ねてみる等、少しずつ輪が広がっていった。

色つけ

期待する経験

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

失敗の原因を考え、次はどうすれば良いのか試行錯誤する。

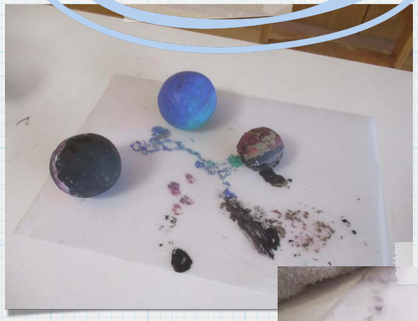
子どもの姿

布で磨き艶が出た泥団子を、「モンスターボールにしたい。」「恐竜の卵にしたい。」「宝石にしたい。」と自分がイメージしているものに見立てて、絵の具で色をつけた。

絵の具が乾いた泥団子をクリアファイルで磨いて艶出しをした。

クリアファイルで磨くときに力を入れすぎたり、泥団子が脆かったことから、磨いている途中で泥団子が割れてしまった。何故泥団子が割れてしまったのかを振り返り、次回はもっと硬くなる土を使い、磨くときも力を抜いて優しくしようということになった。

＜準備した素材や道具＞
絵の具・梅皿・筆
雑巾・クリアファイル



＜環境設定＞
集中して色つけができるよう、製作コーナーを使用・
絵の具をこぼしたり、手が汚れたらすぐに拭けるように濡れ雑巾を準備。

失敗からの学び

布で磨き艶が出た泥団子に絵の具で色付けをしたが、翌日確認すると絵の具がひび割れ、泥団子の艶部分も剥がれてしまっていた。なぜそうなってしまったのか一緒に考え、小市先生にも相談をし、絵の具の種類が悪い可能性があるということを知った。子どもたちと一緒に専門家に尋ねられる環境があることで、保育者が調べただけでは分からない情報も得られ、そのような存在が身近にいることの良さを感じた。

また、クリアファイルで磨く時に力を入れすぎたり、泥団子が脆かったことから、磨いている最中に割れてしまうのだということにも気がついた。小市先生にアドバイスを貰い、次回はより粘度の高い泥を使って強度を高めることになった。失敗をマイナスに捉えず、原因を追求し次に繋げようとすることで、多くの学びがあった。

新しい泥

期待する経験

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

どのような土を使えば粘度の高い泥が作れるのか、試行錯誤しながら新しい泥を作る。

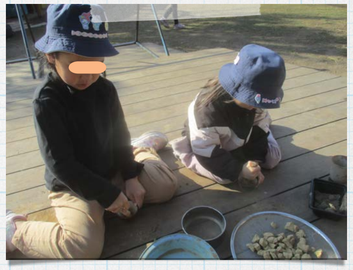
子どもの姿

泥団子が割れてしまったことから、「もっと強ければ良いんだよ。」と気がつき、小市先生にアドバイスを貰った。より粘度の高い泥にするために、土粘度を加えたら良いのではないかということで、固まった土粘度をすり鉢で粉状にして土に混ぜ泥にした。

同じ目標に向かって試行錯誤を繰り返すうちに、「私が粉にするから、〇〇ちゃんはふるいやって。」「水持ってくるから混ぜておいて。」と子ども同士で声を掛け合いながら役割分担をするようになった。

土のみで作るときよりも弾力のある泥団子になり、「（土のみの泥団子とは感触が）なんか違う。」と実際に触ってみてその違いにも気づいているようだった。

始めは主に5歳児がしていた泥団子作りだが、この頃には、すり鉢を使って土粘度を粉状にすることに興味を示した4歳児・3歳児も遊びの輪に加わっていた。



＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
土粘度・すり鉢・すりこぎ

＜環境設定＞
すり鉢とすりこぎをいくつか準備し、作業自体に興味を示した子どもがすぐにやってみられるようにした。
水道の近くにコーナーを設けた。

それぞれの角度から

失敗の原因を考え、小市先生に貰ったアドバイス通り土粘度を粉状にして混ぜた。土のみで作った泥団子との感触の違いに気がつき、手応えを感じられたことで、完成への期待値が高まった。泥団子の完成までは長期間かかるが、短いスパンで様々な変化が見られるため、興味関心が継続しているように感じた。

土粘度をすり鉢で粉状にする作業に興味を示した4歳児・3歳児も遊びの輪に加わった。同じ遊びだから皆同じことをしなければならないということはなく、それぞれが興味を持った角度から入り込み、同じ空間で遊んでいる中で少しずつ互いのしていることに興味を持ち始める。そうして、遊びの輪が広がり、遊びが発展していくと感じた。

凹凸削り

期待する経験

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

凹凸を削る過程で、同じところを削り過ぎないように満遍なくふるいを動かしたり、表面を削り過ぎないように力加減を工夫する。

子どもの姿

泥団子の表面にできた凹凸をなくしたいと奮闘し、削って滑らかにすれば良いのではないかと考えた。泥団子の表面を削れるものはないだろうかと、プラスチックコップや瓶の口を当てて試し、最終的にふるいで削れることを発見した。

同じところを削り過ぎないように数回に一度表面を確認したり、優しくふるいを当てるなど、慎重に削っていた。中には、ふるいを動かすよりも泥団子を動かす方が満遍なく削れると工夫している子もいた。

＜環境設定＞
すり鉢とすりこぎをいくつか準備し、作業自体に興味を示した子どもがすぐにやってみられるようにした。
水道の近くにコーナーを設けた。

＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
土粘度・すり鉢・すりこぎ

仲間と一緒に自分を超える

泥団子の表面に凹凸ができてしまい、一時は理想の泥団子に到達することを諦めかけた子どもたちであったが、一人の「凸凹削ってみたら良いんじゃない？」というアイディアから再奮闘し、試行錯誤しながらふるいを使用して凸凹を削った。一人では諦めていたであろう子も、友だちのアイディアと行動を見て、自分もやってみると諦めずに取り組む姿が見られ、まさしく「仲間と一緒に自分を超える」瞬間だと感じた。

作り直し

期待する経験

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

友だちと励まし合いながら、互いに刺激を受け合い、思想の泥団子を作るべく創意工夫を重ねる。

子どもの姿

完成間近の泥団子を落としてしまい、真っ二つに割れてしまった。悔しさや悲しさから目一杯に涙を溜めながらも、自分に言い聞かせるように「直せるから大丈夫。」と割れた泥団子をくっつけようとする。友だちに励まされ、涙を拭って、保育者に「どうすれば良いかな。」と助けを求めた。

泥団子を割ってしまった子を見て、周りの子どもたちも「割れるんだ…。」と衝撃を受けていた。泣いている友だちを見て、「大丈夫？」と気にかけたり、「もう一回作ろう。」「直せば大丈夫だよ。」と励ます姿が見られた。

保育者と一緒に小市先生に泥団子をくっつける方法はないかと尋ね、「粘土質な泥でくっつける」「一度粉に戻して作り直す」という方法を考えた。後者の方が綺麗に直せるだろうと聞くと、「綺麗に作りたい。」と粉に戻すことを決意。

＜環境設定＞
すり鉢とすりこぎをいくつか準備し、作業自体に興味を示した子どもがすぐにやってみられるようにした。
水道の近くにコーナーを設けた。

＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
土粘度・すり鉢・すりこぎ

理想の泥団子

泥団子作りをしている子どもたちの中で、一番初めに色つけに取りかかれそうだった子が、完成間近の泥団子を落として割ってしまった。悔しさを滲ませながらも、友だちに励まされ諦めずに作り直すことを選んだ。すぐに直せるが継ぎ目が残ってしまう方法と、時間かかるが綺麗に直せる方法の二択で、一度粉に戻して綺麗に作り直すほうを選んだ。やはり、子どもたちの理想の泥団子は凹凸がなく表面に光沢のあるピカピカの泥団子なのだということを改めて感じた。

凹凸埋め

期待する経験

友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

凹凸を埋める過程で、同じところに水をつけ過ぎないように満遍なく塗り広げたり、水の量を調整する。

子どもの姿

凹凸を無くすべく表面を削ると、表面のざらつきが気になるようになった。小市先生に相談し、表面に水をつけて粘土質を溶け出させ、それを塗り広げると良いと知る。始めは「水つけて良いの！？」と不安気な子どもたちであったが、これまでにも小市先生からのアドバイスをもとにやってみて成功した経験があるため、「こいっちゃんが言ってたから大丈夫だよ。」と挑戦していた。指を同じ場所で止めてしまったり、水を多くつけすぎると表面が剥がれてしまうことに気がつき、水を少量ずつ満面なく塗り広げるよう工夫していた。

一度表面に水をつけただけで、見違えるほどにざらつきがなくなり、表面が滑らかになった。目に見える変化に意欲が高まり、「これが終わったら色塗れるよね！」と次の工程を楽しみにしていた。

＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
土粘度・すり鉢・すりこぎ

＜環境設定＞
すり鉢とすりこぎをいくつか準備し、作業自体に興味を示した子どもがすぐにやってみられるようにした。
水道の近くにコーナーを設けた。

変化による探究心の深まり

小市先生のアドバイスから、泥団子の表面に水をつけ、粘土質を溶け出させ塗り広げることで、表面のざらつきをなくした。始めは不安気な子どもたちであったが、実際にやってみるとすぐに効果が現れ、次の工程への期待と意欲が高まっていた。子どもたちにとっては、徐々に変化が現れるより、ある程度分かりやすい変化の方が刺激的で探究心が深まる。

手の平で磨く

期待する経験

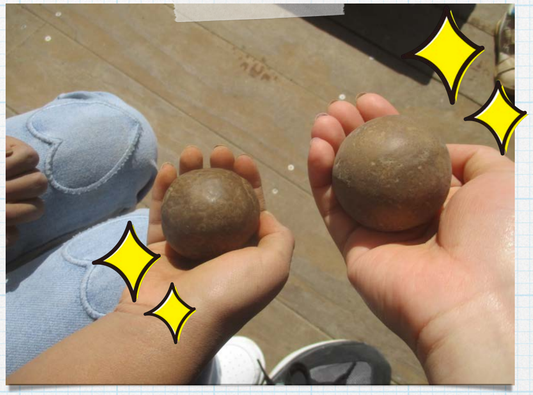
友だちと泥団子作りのコツ等を共有し、コミュニケーションを取りながら遊ぶ。

どんな泥団子を作りたいかイメージを膨らませながら、自分の理想を目指して継続的に取り組む。

子どもの姿

凹凸がなくなった泥団子を手の平で擦って磨き、表面についた細かい砂を取り除く。泥団子を回しながら、表面を満遍なく磨く。泥団子の色が変化し表面に艶が出てくると、「こんなにピカピカになるの！？」「これで色塗れる！」と喜び、事務室の保育者や園庭にいる保育者に見せて回っていた。

保育者の泥団子を見て、「早く先生みたいにしたいな～。」と泥団子を磨く手を早めた。友だちが保育者に泥団子を見せて回っているのに気がつくと、「どうやったらそんなにピカピカになるの？いいなあ。」と憧れを口にしていた。



＜準備した素材や道具＞
水・コップ・ボール
土・ザル・ふるい
プラスチックケース
土粘度・すり鉢・すりこぎ

＜環境設定＞
水道の近くにコーナーを設けた。
保育者も一緒に遊びながら、モデルとなる泥団子を作り上げることで、好奇心や意欲を引き出す。

認められて

泥団子の色が変化し表面に艶が出てくると、事務室の保育者や園庭にいる保育者に見せて回っていた。「凄いね！触っても良い？」「どうやったらこんなにピカピカにできるの！？」と驚いたり、「宝石みたいに綺麗だね。」「こんな泥団子見たことないよ。」と褒められ、認められることで、「だって、すっごく時間かかったんだよ。毎日磨いたんだもん。」と自信に繋がっていた。

泥団子の変化はもちろん、周りの保育者や友だちから認められることでも、意欲が高まり探究心が深まる。

今後、絵の具の種類や方法を変えて、泥団子の色つけを行う予定…。

まとめ

「壊れない、ピカピカの泥団子を作りたい。」という思いから始まった泥団子作り。

砂団子から泥団子へ、より粘度の高い泥へと土作りから工夫した。その中で、どのような土が適しているのかや、どのような状態（石が入っていない方が良いなど）にしたら良いのかなど、自分なりに考えたり、保育者に尋ねたり、時には子ども同士で考えを共有する姿が見られた。

友だちと共通の目的を持って遊ぶことで、互いの発見を共有したり、励ましあったりと子ども同士が関わり合う場面が多くあった。友だちの泥団子を見て刺激を受けることで、意欲が高まったり、一人では継続しづらい困難な内容でも、友達から刺激を受けて、興味関心が継続している姿も見られた。

始めは保育者を頼っていた子どもたちが、友だちに憧れを抱いたり、頼る姿が見られるようになり、保育者がその場にいなくても子ども同士で教え合いながら泥団子作りをするようになった。特に、当初から泥団子作りをしている子どもたちは、後から泥団子作りを始めた子どもたちに頼られることも多く、自信や意欲に繋がっていたように思える。必要に応じて援助をしながらも、時に少し離れて見守ることで、子ども同士の関わりが深まることがあると感じた。

泥団子の表面に凹凸ができてしまった場面では、完成を諦めそうになった子が、友だちのアイディアにより再奮闘する姿が見られた。まさしく、『仲間と一緒に自分を超える』瞬間だと感じた。

泥団子の表面に艶が出ると、それを色々な保育者に見せにいく姿も見られた。認められることで自信に繋がっていた。泥団子の変化はもちろんだが、周りの保育者や友だちから認められることでも、意欲が高まり探究心が深まると感じた。

今回の活動では、数回、小市先生にアドバイスを頂いた。子どもたちと一緒に専門家に尋ねられる環境があることで、保育者が調べただけでは分からないことや専門家ならではの知識が得られ、より探究活動が深まり遊びが発展したように思う。

活動を通して、子ども自身が興味深さを感じ、「もっと知りたい」と感じた時に、『好奇心』『探究心』が生まれるのだと感じた。また、理想に近づけるべく様々な工夫を凝らし効果が得られると、それが意欲となって次に繋がっていて、目的や理想を追求することで、興味関心が継続されているように感じた。

探究的遊びを発展させるためには、子どもたちが何に興味を示しているかに加え、今後どのようなことに興味を持つか、先を見据えることが必要になってくる。その予想をもとに、情報や道具を準備しておくことで、新たな気づきや興味が生まれ、遊びが発展すると感じた。

探究活動が発展し深まるためには、上記のような『人的環境』と『物的環境』が必要不可欠である。保育者は、子どもの表情や言葉、行動から思いを汲み取り、常に環境を見直す必要がある。